
ゴッドハンター

木藤 紫苑

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゴッドハンター

【Nコード】

N8378Z

【作者名】

木藤 紫苑

【あらすじ】

神狩りという名を背負うゴットハンター達。彼らは十三人の神の中の裏切り者、アリスを討伐するために日々奮闘中である。老若男女を問わず聖戦に駆り出されていくそんなある日のこと。部外者を受け付けない彼らハンターのイギリス本部に一人の少年が忍び込んできた。その日、運命が動き始める……

1 OPENING 序章

広場はいつも以上に賑わっていた。

中央にたっている天使の像を見上げる。優しい微笑みを浮かべているはずのそれは、どこか奇妙に歪んだ表情を浮かべていた。

「へえ、これが今回の犯人かあ」

呟いて、冷笑した。

「????この世は、カオスより生まれた。神がお創りになった。ただし、神は十三人いた。」

「ねえ、これそのままやっていいのかな?人がたーくさんいるけど」

ロゼッタは隣の青年を仰いだ。

彼は今回のパートナー且つブレーキ役だ。つまり騒ぎが起きたら鎮めないといけない、そんな役割を担っている。

「お前は強いから、他人に怪我なんてさせないだろう?」

「????十二人はコスモスを創った。その内一人は天と地を

「そーだねー」

口元に冷笑を刻んだまま、ロゼッタは林檎を一口齧った。

「それじゃあ、ミキがあいつを起こしてきてくれる?足をちよっと突くだけでいいからさあ」

「……俺が?」

「うん、君。頼りにしてるんだよおミキい。ボクよりお兄さんでしょお?」

「……」

????一人は光と闇を

ミキと呼ばれた青年は面倒くさそうに天使像に近づいていった。
彼が何かを囁いて、

「きゃーっ!」

周囲を歩いていった市民の口から悲鳴が漏れた。

天使像がひび割れた。正確に言うならば、像を形成している白い石が割れた。

割れて崩れていく様はまるで昆虫の脱皮のようだ。

その中から、歪な形をしたモノが出てきた。

それは、鎧を纏った天使。

身体のうちこちがかすんでいる。どうやらつい最近に破壊されかけたらしい。

????一人はありとあらゆる植物を、また一人はありとあらゆる動物を

ロゼッタは嘲笑すると、齧りかけの林檎を放り捨てた。

常人の域を遥かに超えた跳躍力を活かして歪んだ天使に向かってジャンプした。

踵の高い黒い靴が熟れた果実を踏み潰す。

グチャリ。

気味の悪い音がして林檎が割れた。

深紅の皮がはじけて、黄色い果実が散る。

????一人は風を、一人は火を、一人は水を、一人はその他の物質を

憎むべき墮天使は隠し持っていた槍を振り回し、悲鳴を上げる人々を襲っている。もう既に何人が刺されていて目が虚ろになっていた。

「アハハッ、お腹がとおても空いているんだあ？」

????そして、大御神は御自分の姿に似せて、人間をお創りになった。

夢、気持ち、人と関わることで生まれた記憶……。

ロゼッタ達はそれらを合わせて“夢”と呼ぶのだが、目の前の墮天使、通称トループの餌はそれだ。

“夢”は心に溜まる。トループはその心ごと奪うのだ。それは人格をも失うことだから、墮天使の餌となった人間は生き人形のようになってしまう。

ちょうど足下に横たわり肩から僅かな血を流している男性がその状態にある。目が虚ろで呼びかけても反応が薄い場合は、大抵が“夢”を失っているのだ。

ロゼッタの着地のとばつちりを避けるためか、ミキが混乱し逃げ惑う人ごみの中に紛れ込んだ。

いや、あれは騒ぎを鎮めに行ったのかな。

呑気に思い、トループの上に着地する。

????また、別の一人は全ての生ある物がもつもの、すなわち神が授けるものの一つである罪と罰を

ガッチャン！

派手な音がしてトループがうつ伏せぶ倒れた。その背中を踏みつけるのはロゼッタだ。

「駄目でしょ？神の使者が鎧なんか着てたらさあ？」

周囲の悲鳴を含めた喧噪にも負けない大きさで、トループは耳障

りな音を発している。長時間聞いていると精神的に参ってしまう様なノイズだ。

「アリス様の為にアリス様の為にアリス様の為に……」

そんな声で呪文のように主人の名前を唱える天使を見ると、怖気が走る。

????一人は枷を、

「……アリス様の為に我は造られ生きてアリス様の為に我はここに居るアリス様が待つておられる極上の“夢”をこちそうしなければ全てはアリス様の為にある我はアリス様の為にならどんなことでもするのだ邪魔をするなアツ！」

トループが暴れ出すよりも早く、ロゼッタは後退した。

天使の槍をかわしながらタイミングをはかる。逆上した堕天使は厄介で、むやみに攻撃しても埒が明かないのだ。

「ロゼ！」

市民を広場の端に誘導していたミキが戻ってきた。

????一人は最後まで残る希望をお創りになった。こうして全てのものがそろったが、神々は地上の楽園であるエデンの園を創り、自らもそこに住まわれた。

「あつ、ミキい、どうだった？大丈夫だった？そして危ないからしゃがんでねーっ」

ミキはすつと身をかがめて、飛んできた刃を避けた。

「ああ、反抗期な少年がいたけど。何とかここだけの騒ぎにとどめられたよ。さすがは科学班。こちら辺の電波を全部切ることができるなんてさ」

「あはは、そうだねー。警察さえ来なければボクらは正当化される。政府とか、裁判所とかにはボクらの権利は使えるけどねー。

一般人には通用しないもんね。こんな組織があることすら知らないんだからさあ」

トループは基本的に一般人を殺さない。人が死ななかつたら、ロゼッタ達は安心して活動できる。

- ???しかし、その内の一人は大御神の御心のそぐわないことをしたので、そこから追放された。

広場の端で、人が騒いでいる。

そろそろ引き上げないと面倒くさいことになりそうだ。

世界レベルどころではない本部科学班の力でも、人類の伝達力をなめてはいけないのだ。

「ロゼ、今日はどれにする？鉄砲で即殺するか？それとも二本刀かな？」

「んー。原形にしとくよお」

刃を避けながら答える。

暴れ過ぎたのか、トループは肩で荒々しく息をしている。元々木津付いていた身体で無茶をしたのだから無理もない。

豪快に振られた槍を避けるために一歩飛び退くと、靴がもう一度潰れた林檎を踏んだ。残っていた塊さえも原形を失う。

「疲れちゃったあ？でも、大丈夫だよお」

そう言いながら、胸に手を当てる。

次の瞬間、そこからほのかな光が発せられ始めた。

墮天使は目を見開いている。

「すぐに、お前をこれみたいにしてあげるからね？」

つま先で潰れた林檎を示しながらロゼッタは手を引いた。

その動きに合わせて、光の正体があらわになる。

- ???その神は、残りの神々とコスモスの全てを憎むようになった。

それは、一振りの剣だった。

長さはロゼッタの身長半分くらいで、剣にしては太い。

金色の装飾が施されている、綺麗な鋭い刃の剣だ。

ロゼッタは剣を軽く振って、驚愕したままのトループを見据えた。
「お前は放っておいても消えそうだけど、ボクらの任務はお前を抹消することだからね〜」

そう言い放った瞬間、彼女が消えた。

そして次の瞬間には、呆然としているトループの後ろに立っていた。

横に流した剣には一筋の血が付いている。

「あ……、ああ、あつ」

堕天使は自分の身体を見て悲鳴をあげた。が、もう遅い。

真つ二つに切断されたその肉体は、大量の血を流しながら消えていった。

元々天使に血液なんてものはない。この血は“夢”が形状変化したものだ。

返り血を浴びたロゼッタは、何も言わずに頬に付いた赤い液体をぬぐった。

そしてそれを舐めた。

それがいつものことなのか、ミキは気にしていない。

「キヤハッ！アハハッ！ああ、この子はたくさん食べたんだね〜」

アハハ！」

急に笑い出して、ロゼッタは剣を血塗られた地面に突き立てた。

トループから吐き出された“夢”は、早く元の身体に戻さないと迷子になってしまう。

飛び散った血、いや“夢”は、輝きながらやがてはすうっと消えていった。

広場から戦いの跡が消えていく。

ただロゼッタは、チェシヤ猫のような笑みを口元に張り付けさつきまで液状化の“夢”が散っていた地面を見つめていた。再び人氣が戻ってきた。倒れていた人達も喰われた“夢”が戻ったのか、危なっかしい足取りではあるが歩いていった。

何人かはあきらかに怯えていて、何人かは不思議そうにしている。

「また林檎買わなきゃ。潰しちゃったあ」

「あんな……」

通りすがった少年を一瞥すると、ロゼッタはミキと広場から出て行った。

『……???さあ、始めよう。我らの聖戦を』

十

レインはむすつとしながら広場の端に移動した。

水溜まりに映った自分を眺め、ぼんやりとしていたところに見知らぬ青年がやって来たのだ。

こんな暑い日に真っ黒なコートを着ている不思議な青年の言葉で我に返り、周囲を見回すと皆隅の方へ移動していた。

だからこうして自分も端っこにいたのだ。

遠くからでよく分からないが、中央にたっていた天使像がなくなつて、代わりに歪なモノが現れたのが見えた。

あちこちかすんでいるが、天使のような姿形をしている。

それと対峙する人もいた。先ほどの青年と似たようなコートのフードを被っていて顔は見えず、性別は分からなかったが小柄な人だった。

最近、よくこういうことが起こる。

CGなのか、番組の特撮なのか、それとも単なるいたずらなのか。それにしたって迷惑なのは変わらない。

周りの人達もブックサ言っている。携帯電話の電波が急に届かな

くなつて、皆不安そうだ。

しばらくすると、その天使らしきモノは消えていった。最後に上がった液体は何だったのだろう？赤かったが血つてことはないだろうし。

ベンチに座ろうと歩いていると、同じく歩いていたフードの人と目があつた。

迷惑なんだよという意思をこめて睨んだが、その人はおもしろそうに目を細めて先程の青年とどこかに行つてしまった。

思考を停止して、水溜まりの自分を眺める。

ぱつと見でそれと分かる、青がかった銀の髪。

絵本に出てくるバンパイアのような赤い瞳。

さっきのフードの女性か男性か分からない人は、これが珍しかつただけだろう。

「あー、レイン。待った？」

友人のビリーがやつと来た。彼は時間にルーズなのだ。

「ああ、大丈夫。暇はしなかった」

「またあいつらが来たのか？」

彼もフード姿の人が天使らしきモノと闘っている場面を見たことがあるのだ。

「まあね。つたく、あいつらの家に行つて抗議したいよ、ホント」

「……なあレイン。俺、あいつらの家知ってるぞ？」

2 INVADER〜侵入者〜(1)

ただっ広い土地に、これまた大きな屋敷が建っている。中世時代に建てられたものらしい。

屋敷まで続く芝生の並木道は、木陰が心地よい温度を保っていて過ごしやすい。

「おはようロゼッタ」

二人の少年少女が建物から出てきた。

少年はシャンデット・チェッカーという。

そして隣の少女はルーシー・ヘネシアといって、シャンデットとは生まれる前からの許嫁だそうだ。

「おはようシャンデット。ルーシーもおはよ〜」

ロゼッタは明るく返した。

「二人はこれから任務う？」

万年人員不足なので、十四歳でも戦闘に駆り出されるのだ。

「いやいや、違うから。俺らはこれから修練場に行くつもりだよ」

苦笑しながらシャンデットが答えた。

確かに毎日任務だと体がもたない。

「……それでね、ロゼちゃんも誘おっかなー……って」

ルーシーがボソボソと付け加えるのを見ながら、無理なんてしないでいいのにねーっと、心の中で冷笑する。

ルーシーが自分のことをあまり好きではないのは知っている。理由は分からなくもないが不明で、それでも苦手意識を持っていることにははじめから気付いていた。

「ううん〜、いいやあ。ボクはここで休んどく〜」

「そうか。昨日の仕事、そんなに疲れるもんだったのか？俺たちの姫が疲れるなんてことは無いと思うけど」

「平気平気。ミキと組んでたんだもん、楽できたよ〜。ねー、ミキ〜?」

頭上から葉や小枝が降ってきた。

それらに混じって、すりりとした体躯の青年が軽やかに着地する。ロゼッタが背もたれにしていた木に登っていたのだ。

「うげっ、ミキ……！どうしてそんな所から降ってくるんだよ！？猫かお前は！」

喚くシャンデットを無視して、ミキはロゼッタの頭を撫でた。

くすぐったいのでやめて欲しい。撫でられるのは嫌いではないが。「無視しんなよっ、大人げないぞ！ちよっ、こらっ。聞いてんのかミキ！」

シャンデットはからかいがある。見ていてもやっつけていてもおもしろい。

「あ？うるせーな。スクローラ聖書のアリス創世記すらも覚えてねーお前に言われたくねーよ」

スクローラ聖書とはロゼッタ達が使っているこの世の真実を書き綴ったものだ。

シャンデットが反抗して何か言ったが、聞かなかったことにする。というかしたい。

それに対してミキが冷たく物を言う。

が、こりないのかシャンデットはまた言い返した。

「なんだよっ！この××！」

口汚い言葉にロゼッタはキャハハと笑い、ルーシーは興ざめた。またも言い返されて、シャンデットはついに素手で殴ることにしたらしい。

だがミキは手強い。素手では絶対に勝てない。武器と素手でもシャンデットの方が絶対負ける。

「……シャンデット、やめてよ……。朝から喧嘩は良くないよ」

「いいんじゃないの？仲良くなってさあ。……そこだよミキっ、いっけー！」

「……ロゼちゃん、煽ってどうすんのよ」

ルーシーがため息をついて、二人を止めようとした。

が、その必要はなかった。
なぜならだ。

「ユリニア様！」

サポーターがミキを呼んだからだ。

ミキは上からの命令にはよほどのことがない限り忠実で、逆らったことはあまりない。

サポーターが呼びに来るということは、上に呼ばれているということになる。

だからミキはシャンドットから離れた。

「……あ、すみません。取り込み中でしたか」

「いや、大丈夫。問題ない」

「そうですか。……おはようございます、イリンドーム様、ヘネシアさん、チエツカーさん」

サポーターはこっちに向き直って礼をした。

「おはよおエリー」

以前怪我の治療をしてくれたのがこのサポーターだったのですぐに名前が分かった。

「……任務か？」

「いえ、支部の方が呼んでいるだけです……。あの、だいぶイライラしてらしたので……ハラード支部長が……。早く来ていただけると、その。嬉しいのですけど」

ロゼッタは発作的に木を殴りつけた。

あの馬鹿！ハラードは大っ嫌い。ううん、馬鹿以下だね。あんなの表現のために使われる馬と鹿がかわいそうだよ。

ミキも僅かだが顔をしかめた。

「分かった」

再度ロゼッタを撫で、林檎を一つ差し出してミキはさつさと歩いていった。

林檎は好きだしミキはよくこういうことをしてくるので、ロゼッタは小さくなりつつある背中にありがとうと呟いた。

きれいな緑の中、黒の長髪の持ち主である少女が白黒の服を着て深紅の林檎を齧る。

十分に絵になるだろう。

だが絵は上手くないし自画像なんて描いたこともない。

シャリシャリとした食感を楽しみながらロゼッタは暇を持て余していた。

一人でいる時間は嫌いではないが、暇なのは好きではない。

ミキがエリーと建物に入ってしまった後、シャンドット達も行ってしまったのだ。

つまらない。

なら一緒に行けば良かったじゃないかとなるのだが、問題はシャンドットやルーシーと一緒に修練しても大して面白くないということころなのだ。

やるならせいぜいミキ程の実力がある人になりたい。

「退屈」

そうぼやきながら機械的に林檎を齧る。それしかやることがない。人生には余裕も大切だと言うが、暇過ぎるのもいけないだろう。

ここは何かハプニングが起きないといけない場面じゃないかな。

……。でも残りの神様は、忙し過ぎてちっぽけな女の子のつまらないお願いなんて聞いてくれないんだろうな。

「……あつ」

ぼんやりしていて近付いてくる足音に気付かなかった。

あげられた小さな声に反応して、うわ不覚などと呟き、ロゼッタは顔を上げた。

すぐそこに立っていたのは、

銀色で赤い瞳をした少年だった。

服のあちこちが汚れ、体も泥にまみれている。

それでも間違いない。こいつは？

「……あつれー。昨日広場にいた凡人が、どおしてこんな所にいるの？」

前言撤回。

神様は、ちゃんと見てくれてる。

少年はしばらく呆然としていたが、我に返ると一目散に逃げ出した。

ロゼッタはにこつと笑って、少年を追いかけた。

三秒足らずで追いついてしまう。が、少年は一般人にしては怖い程速かった。

「駄目だよお、勝手に入ってきたのに挨拶無しで行っちゃうのはー。無礼だなあ」

背中を強く押してこかす。

鈍い音がして少年は倒れた。

慌てて起き上がろうとするその体を押さえつけると、必然的に抱き合うような形になった。

体を反転させた少年はロゼッタを見て怯え出した。

「プッ、アハッ。もー、いいハプニングが起こるもんだね？」

ここに入ってくるのには恐怖しなかったくせに、今さら怖がるんだあ」

少年が何か言おうとした。が、ロゼッタは彼の口を塞いで後方へと顔を向けた。

「んー、いい餌をあつさりサポーターにやるのはおしいなあ。だからね、君はおとなしくしてねっ。じゃないとかわいがるからね？……つまりは、殺す。……いいねー？」

純粹な笑顔で物騒なことを吐く。

ロゼッタは少年を木陰に引きずって隠した。

ついでに彼の服を貫通するように木の幹に枝を突き刺す。逃げられるとこっちが困るからだ。

下手に動くと木の皮に皮膚を引きはがされるだろうが、それは別に困ることではないから忠告はしなかった。

木陰から出ると、ロゼッタはすぐに呼び止められた。

「あのっ、イリンドーム様！」

門番の見習いのグースだ。

「ん？どーしたのぉ？」

満面の笑顔で応える。見ていると寒気が走るような笑みだ。

チッ、人の楽しみを邪魔しといてさぁ。さっさとどっか行つてよ。

「この辺で侵入者見ませんでした？……あ、あの！俺……、いえ私が引つ込んでいる間に門番が少年にノックアウトされて……！それで内部にいれてしまったと……」

ロゼッタの顔を見て、グースの声はだんだんしぼんでいった。

決して起こっている訳ではない。それどころか笑顔なのだが……。そう、人をいたぶるのを楽しんでいるような、そんな笑みだから相手はおどしてしまう。

「へえ〜？そうなんだ。じゃあ、ボクからエリックに言つとくよ」

その言葉にグースの顔が青ざめた。

「ヴェ、ヴェルスカーノ司令長、に……ですか？」

エリック・ヴェルスカーノ。

彼こそロゼッタ達を束ねる指導者だ。本部で一番偉い存在——つまりは組織に関係する物の頂点に立つものだ。

「そうだよ。……君は、引き続きその侵入者、とやらを探しててね。あとね、この辺にはいないから。ずーっとここにいたけど変な人は見なかったよ。シャンデットを変人と見るなら別だけど。」

……このボクが言うんだから、信用できない訳ないよねえ？」

グースは無理のある笑い声を捻り出し、そくさくと走つていった。いや逃げていった。

だらしない。

ロゼッタは満足げに微笑むと、少年を留めておいた木のところに

戻った。

「……なんでかばった」

ずいぶんと冷たい声を出す子供だ。

彼の手はすり傷だらけだった。無理に自分を固定している枝を抜こうとしたのだろう。

おもしろそうに目を細めて、ロゼッタは少年の前にしゃがみこんだ。

「なんでかばったんだって聞いてるんだ！」

「アハハー。あゝ、意外と元気のある子だね。……何、それっが守ってくれた人に対する口の聞き方あ？」

「誰も頼んでない。何を……っ。あぐっ」

彼が暴れないように両手足を自分のそれで押さえつける。結構痛いはずだ。いくら体重の軽い人でも力を加えたらそれなりの痛みになる。

いい暇つぶしになりそうだ。せつかくの機会なのだから思う存分楽しみたい。

「さっきのサポーター達に捕まったらね、君の記憶の一部、消されちゃうんだよあ？ここは部外者が来ちゃあいけない場所だからさ！まあそれが良いって言うんなら、ボクは別に止めないよ？」

「……はっ、お前に捕まっただから、結果としては同じじゃあないか」

それに答えず、別のことを質問する。

「お前の名前はなんて言うの？」

「……はあ？何で俺が」

「いゝから教えなよあ」

少年の顔は痛みに歪んでいる。

「……。暴力で吐かせるなんて、最悪だな」

「悪いねー。仕事がそういうジャンルなんだよあ。で、貴方のお名前は？ボクはロゼッタ・イリンドームって言うんだよ」

ただの少女に行っても害はないだろうと思ったのか、ただ単にや

けくそになったのか、

「……レイン。レイン・ディアナイト。これで文句ないだろ」

一応答えてくれた。

「あ、なんだ。名前違うなあゝ、残念」

「はい？」

ロゼッタは手を離して、パアツと花のような笑みを浮かべた。そして歓迎するように両腕を広げて朗らかな声で言った。

「ううんー、こっちの話い。気にしないでー。それじゃあ、どーもはじめましてレイン。ようこそゴッドハンター本部へ！」

2 INVADER〜侵入者〜(2)

爽やかな風が吹く。

が、二人の間には爽やかさなんて欠片もなかった。

微妙な数秒が過ぎー！。

「……あ、の？」

理解できていなさそうな声を出された。

「むー。一から説明するのめんどくさーい」

「……俺理解しなくてもいいししたくないしどうでもいいし足痺れてきたから……」

「うるさいなあ。……いーい？レインはね、ここに入ってきた」
だから？という目つきがむかつく。

「ここは、ボクらが特別な結界を貼っているから一般人は基本的に入れないんだよー。ときどき何かのミスで入って来る奴もいるけど、入れるのはボクらと同族の人達だけ。門番は特に意味ないんだよねー。コインを持ってないレインは、どっちだと思われたのかなあ？」

もしも入り込んできた一般人ではなく、化けた堕天使と見られていたら今頃きつとレインは死体になっているはずだ。

「同族！？いい加減にしろよっ。さっきから結界とかトループだとか訳の分からない話ばかりで！俺は、市民に迷惑かけてるてめえらに文句言いに来ただけなんだよっ」

「あははー。ボク達がいなかったらとっくの昔に皆死んでるよお？
探す手間が省けたよ。ありがとー」

ロゼッタは右手の指をレインの額に押し当てた。

指先がほのかに光り出す。その光の色は、昨日のと違っていた。
レインはギョツとしている。

それはそうだ。普通、人体は光らない。ましてや紫の光なんて、蛍とか夜光虫とかそんな発光する生物でもあり得ないだろう。

「怖がらなくてもいいんだよ。ちょっと痛いかもしれないけど、

我慢してね？ボクも大変なんだからさあ。これからね、レインがボクラと同じだってこと証明してみれるからね」

楽しそうに言って、ロゼッタは稀有な能力を発揮した。

ロゼッタは目を開けた。

「うつわあ。暗い“夢”だなあ」

目の前には見たことのない街が広がっていた。

禍々しい程黒い夜空。そこに浮かんでいる不気味は形の三日月。全体的に暗いイメージだ。

だが、建ち並ぶ建物には明かりが溢れているし、道にはみ出したプラントーには暗くてよく分からないものの、鮮やかな色の花が咲き乱れている。よく見てみると、空には淡い星まで浮かんでいた。きよろきよろと視線を走らせながら歩く。

といつても、実際の体はここには無い。

ここはレインの“夢の街”なのだ。

人は誰しも心に“夢”を持っている。そしてその“夢”はその人の人格等に合ったイメージの街を造り上げ、その中に“夢”溜めていくのだ。

今ここにいるロゼッタは彼女自身の身体ではなく、ロゼッタの精神???魂、といった方がいいかもしれない???だ。

あるモノを探して歩いている内に、ロゼッタはあることに気がついた。

建ち並んでいる建物の内、半分は廃屋と化していたり光が消えていたり、もしくは土台だけを残して綺麗になくなっていた。

どうやらレインは本当は明るい子なのかもしれないと判断したロゼッタはそのことに戸惑った。

これは一体どういうことなのだろう？

ゆっくり考えながら行きたいが、長居レインの体力を奪ってしまいうのでそのまま歩き続けた。

しばらくすると広場に出た。

「見いつけたーっ」

広場の真ん中には、一本の大木が植えられていた。その木の幹が光っている。

ロゼッタはどんなのが出てくるのかなあ、楽しみだなーと呟きながら、その光の中心へと手を伸ばした。

強い抵抗の後、光の中に入れることができた。

街が弱く振動する。

「っ！？」

ロゼッタは目を大きく見開いた。

嘘！？あれは、あの剣はボク（、、、、）！？

そこにあつたのは、一振りの剣だった。

先日ロゼッタが出した剣と同じ形、同じ大きさ、同じデザインの物だ。が、色が違う。

色しか違うない。

そんなはず無い。

だってボクは……ボクには……、でも。

焦っていても埒は明かない。

躊躇しながらもその剣の柄を握る。

心配ならやってみればいい。すぐに白黒がつくのだから。やってしまえばいい。

しっかりと握って、剣を引っ張った。そしてそのまま“夢”の外に出ようとする。

街が揺れる。レインの悲鳴も聞こえてきた。

“夢”の中の物を、自分の中身を外に引っ張り出すのだから、それは痛いだろう。普段は専用の薬を使うのだが彼は何も服用していない。

「うるさいっ。暴れるな！ボクは……っ」

渾身の力で、レインの剣を引いた。

ロゼツタは目を開けた、ただし今度は本物の身体の目だ。
右手はレインから離れていて何かを握っている。

安心して、はあとため息をついた。

握っていたのはきらめく漆黒の小さな石だった。

良かった。こいつは大丈夫みたいだねー。

「……ため息ついて、ないで……さつさとどいてもらえませんか
ね？いつまで、人の上に乗っかってるつもりなんだよ」

途切れ途切れにそう言っ、レインはどさりと倒れた。枝に刺
していた服が破ける。

同族とは言え、やはり訓練していないと体力は常人と同じぐら
いしかないようだ。

「いーじゃない」

「良くない。……俺に、何したんだ」

ロゼツタはため息をついて、手刀でレインの首筋を打って気絶さ
せた。

「どーせ今聞いたって、脳働かないでしょお？疲れたんならさー、
素直に寝ちゃいなよ」

レインを引きずるようにして、ロゼツタは屋敷に向かった。

エリックやカトリーヌにいろいろ言われそうで気が進まないが、
これも仕事だ。

+

思った通り、エリックに怒られてしまった。

普段は優しく温厚な彼なのだが、怒ると怖い。

サポーターが淹れたコーヒーを飲んで、エリックは徒労の吐息を
ついた。

「全く。ロゼ、ああいう人を見たら真っ先に私に知らせろって言っ
ただろ。“核”を出すのは訓練してからじゃないと危険なんだぞ？
下手すれば死んでしまう」

また林檎を齧る。噛み切った果実を飲み込んで反省の色を見せないしやあしやあとした態度で応える。

「平気だよお。ボクがそんなミスする訳無いじゃん」

「そんな驕りたかぶつてると、いつかんでもない失敗やらかすぞ」
「驕ってんじやあないのお。ただの自信だよー、ボクは仲間を死なせたりしないからね？でもサポーターは自守できないからちよつと難しいなあ」

エリックはまたため息をついた。そんなにつくことないだろう。嫌がらせなのだろうか。

「……それを、驕ってるって言っただよ」

そっぽを向いて、ロゼッタは林檎齧りに千年いた。
ふと脇に置いてあった報告書が目に残った。ロゼッタが書かされたものだ。

それをめんどくさそうに読み直して、書き忘れたことがあるのに気がついた。

「あゝ、そうだ。エリック、そのレインって子の武器ねゝ、ボクと色が違うだけの剣だったよゝ」

「ゴホッ!？」

静かにコーヒーを飲んでいた彼は派手にむせた。

近くにいたサポーターが慌てて駆け寄って、エリックにティッシュを渡した。

ロゼッタは心配しているというより、むしろ面白そうにそんなエリックを眺めた。

「あ、ありがとう……。ゲホッ、……はあ。ロゼ、それは本当か？」

「うん、本当だよお」

「でも名前違うよな？“石”を見る限り、普通の人間みたいだし……。お前のパートナーだったらあり得るけど、これも名前が……昔いなかったか？ロゼが住んでいた所にレインっていう人が」

ロゼッタは首を横に振った。あそこに、そんな人はいなかった。
第一銀髪赤目なんて人はそうそういるもんじゃないので一回見たら

きつと忘れないだろう。

エリックは何かをぶつぶつ呟きながら紙に走り書きしている。

「ルル、これをカトリーヌのところに持っていってくれ。……そう、情報処理長のヘネシアだ。それでこつちを科学班のところに。シエドが起きていればそいつに渡してくれ。ありがとう。……念のためDNA検査させるよ、髪とかそういうのね。多分違うと思うけど……、な」

ルルと呼ばれたサポーターは、エリックの指示通り部屋から出ていった。

「……DNA……。そうだロゼッタ！君の検査結果が出て……、それで予想通りだったと。まあ二回目だからな、今さら結果が変わることはないんだけど。で、本支部合同会議が今からあるから一緒に来なさい」

うつわあ、会議つてめんどくさいのになあ。

そう思いながら、仕方なくエリックについて行った。

会議室の空気は尖っていた。

イライラの中心はアメリカ支部のハラードだ。

支部の分際で大きな態度を取る彼がいるから、ロゼッタがどす黒いオーラを出すのだ。

それに、会議にはあまり参加しないもののゴッドハンター代表の一人である幹をサポーターのように扱うのも気に入らない。

おまけに??

「なんで私があんな小娘のためにイギリスまで来ないといけないんだ」

「うるさいなあ。そんなの、お前が支部長になんなかったら良かっただけの話でしょお？支部のくせに口出ししないでくれるかなあ？黙れよ、カス」

自分のことを手駒にしか思っていないところも気に入らない。

ゴッドハンターは彼らのために在るのではない。彼らが、ゴッド

ハンターのために在るのだ。

全員がそろったところで、本部長のエリックが立ち上がった。

皆が静かになる。ハードだけが舌打ちした。

「これより総会議をはじめます。各支部の情報処理長、科学班長、支部長、ゴッドハンター代表はそろってますね。今日の議題の一つ目は、我らが姫、ロゼッタ・イリンドームについてです。本人はここにいるのでご遠慮なく。それでは、説明を。本部のヘネシア情報処理長」

エリックが座って、その隣のカトリーヌが立ち上がった。

綺麗な赤毛の持ち主で、ルーシーとは良い意味で似ても似つかないが、彼女の従姉だ。

「はい。皆さん、書類の一枚目をめくって下さい。……これはイリンドームのDNAの検査結果です。先代の“姫”が持ち帰った血から採取した物を使っています。結果は以前と変わらず予想通りで……」

室内がざわついた。

驚かないのは本部の人とミキだけで、あとはどれだけの年輩者でも落ち着いていない。

「そんな馬鹿な……」

「この間のはミスではなかったのか……！」

「裏切り者が……？ ましてや子を……？」

静粛に！ と、エリックが声を張り上げた。

「私共も驚いています。まさか、アレが子供を産むだなんて……。DNA検査だけでイリンドームがアレの子だとは確かに言いきれません。アレが子供を産めるだなんて考えられませんし……」

「ですが、イリンドームの存在値は人間に劣ります。そもそもイリンドームの特殊な能力もそのせいです。何人かはもう気付いているようですが、イリンドームの中身はアレの“夢”から造られたものではないでしょうか。人間の身体にそれが入り込んだだけでしょう。能力も細かく設定されています」

皆が押し黙った。

ハラードは驚きやら恐怖やらで口をパクパクさせている。

ミキは相変わらざるの無表情で書類を眺めていた。

「じ、じゃあ！コイツはスパイだ！」

無礼にも指さされた。失礼だ。

何人かはギョツとして、エリック達本部の者は呆れてそう叫んだハラードを見た。

「だってそうだろ！アレが人間を造つても何の役にもたたないだろう！？それで敵対する我らの組織の内部を探ろうと……！」

「プツ……、キャハハッ！」

今度は全員がびくつと反応してロゼッタを見た。

こいつは本当に馬鹿以下だ。

世界で忌み嫌われているものにも劣るかもしれない。

「……ハハッ。あー、もうっ。何言い出すかと思つたら……そんなことか。もつとマシなこと言うかと思つたんだけど、お前なんかに期待したボクが馬鹿だったよ。ねー、ヴェルスカーノ司令長お。ボクにも発言権あるよね？」

エリックは面倒くさそうに頷いた。もう好きにしてくれと言いたいのだろう。

アメリカ支部長は本部にも他の支部にも好かれてはいない。

最も、ハラードはアメリカで楽しくやってるみたいなのが。

「じゃあ聞くね？ボクがスパイに見える？ハッ、アレのいる場所は“向こうのお姫様”しか知らないんでしょ？だいたい、ボクがスパイだったらすぐに分かるでしょ？だってあいつらは襲つて来たりしなくなるはずだから。それにずーっとずーっとここにいて仲間を家族同様に思ってるボクが、アレなんかに皆を売ったりしないし」
一文ごとに室内の殺気の濃度が上がっていく。

「そんなこと分かるか！信用できないんだよッ、DNA上アレと家族なんだから……」
バンッ。

置いてある物を踏まないようにして卓上を横切った。

一瞬の出来事だった。

ハラードのむっちりした首に、細い剣をぴたりと当てる。ちょっとでも動いたらすぐに斬れるだろう。

「ボクをつ、アレと一緒になんかすんな……！」

だんだんと青ざめていきながらも、彼の横柄な態度は変わらない。
「……スパイに言われたくないですな」

「黙れデブ。……死にたいなら別に止めないけどね」

最初に我に返ったエリックが慌ててロゼッタを席に戻した。
止まっていたかのように思えた時間が再び流れ出す。

咳払いしてエリックはハラードに、

「スミス支部長、変な妄想はやめてください」
と注意した。

ロゼッタは不満げにハラードを睨みつけた。

一回だけでもいいから、サクツと斬ってしまいたい。……あ、一回で終わっちゃうかなー。

ゴッドハンターの中で最年長の老人もハラードをたしなめた。

「そうじゃよスミス、そういうのは良くない。ここは戦場なのだ。仲間内で疑い合ってどうする。……おう、イリンドーム嬢よ、貴女のことを言っている訳ではないぞ。それにスミスよ、お前は知っているではないか。この子が昔お前の働いていたところにいたのを。何せあの事件で生き残ったのはお前だけじゃからのう……」

彼がその後何を言いたかったのか、結局分からなかった。

今度はバキリという音がしたからだ。

その破壊音は、ミキがボールペンを折った音だった。

黒いインクが飛び散り、書類や衣服にまで降り掛かる。

これが赤だったら綺麗なものにな。

「それ以上言っな……！」

珍しくミキがキレていた。

彼は何に対して怒っているのだろうか？

ロゼッタは“あの事件”云々とやらについては何も知らない。

何か自分と関係あるのだろうか。それともミキのトラウマな記憶なのか。そもそもロゼッタにはハーランドのいる場所にいた覚えすらない。何なのだろう？

こういうことがあったらすぐ止めに入るエリックも、カトリーヌも、何も言わずにミキを見ていた。

もしかしたらゴッドハンターの黒歴史なのかもしれない。

「……そうじゃのうユリニア。すまなかった」

名前の分からない老人は、そう謝って黙りこんだ。

「……はい。では次の議題に進みます。……？何ですか？ああ、イリンドームのことは確信を持ってまとめられないので。この間各部に配った無線機具について報告を……」

今日の会議は長くなりそうだ。

2 INVADER（侵入者）（3）

手に持った花を眺める。

燃えるような紅い花弁に黄色の花粉とこ、れまた鮮やかな緑のコントラストが綺麗だ。

世間一般には縁起の悪そうな花だと言われている。

確かに血のような色をしているし火事も連想させられる。

だが、自分はこの花が好きだ。

綺麗な水の近くにしか咲かないこの花を嫌う人が理解できない。

それはともかく。

今、ロゼッタは医務室にいる。

別に怪我をした訳ではない。ミキがボールペンを折ったときにつくった切り傷を手当してもらったのは一時間前で、レインが運び込まれて三時間経った。

だからエリックがそろそろ目覚める頃だろうと、今回の責任者であるロゼッタをここに連れて来たのだ。

レインを無理矢理連れ込んだんだから、自分で説明しろというにとらしい。

何かのいじめにしか思えない。

ロゼッタはそこまで冷たい人間ではないので、ベッドの上の机に昼食を置いてあげた。

「そろそろ起きるって……。起きないじゃん！。まったく、起ーきてーレ－イーナーっ！」

指でレインを突くことにした。

そうすること数秒、彼はすぐに目を覚ました。ここからがめんどくさい。

「……はれ？ここは」

ぼんやりとした目でこっちを見て来る。

「！？」

次の瞬間、レインは突然ガバツと起き上がった。

机がひっくり返らないように抑える。シーツの洗濯は結構大変なのだ。

「いーから落ち着くう。ボクも大変だったんだからねー？ちゃんと説明するから」

おとなしくした方が無難だと悟ったのか、レインは渋々とだが従ってくれた。

「長くなるし、もう昼だからこれ食べていいよ」

「食べない。毒殺とかされたら困ります」

「え？じゃあボクが食べるよ？毒入ってないっていう証明にもなるしねー」

「白雪姫はそれで死にました」

「アハハ」

愛想の欠片すらない声で言われたら笑い流すしかない。つれない人だ、つまらない。

「さーてと。改めて初めましてー、レイン・ディアナイトクン。言っただけどボクはロゼッタ・イリンドーム。ゴッドハンターのお姫様で、今代のアリスハンター。討伐のスピード部隊の隊長。よろしくねっ」

レインの表情から後半を一言も理解していないことが分かった。仕方のないことだけれども気がすまない。一言で言うならばめんどくさい。この上なくめんどくさい。

「……」

「あの？」

「……。分かった分かった最初っから説明する」

この世を創った十二人の神がいる。

だが神は十三人存在した。

一人はコスモス創造に参加せず、大御神の御心にも反したのでエデンの園を追放された。

彼女の名はアリスと言う。

アリスはコスモスと神々を憎んだ。

アリスが次々と災いを起こすので、大御神は聖なる天使の軍隊を送り込んだ。

だが、天使だけでは足りなかった。

そこで大御神は一人の人間の男に目を留められた。

サブジュー「ゲイトは快く御心に従った。

ただし、アリスも兵を持っていたのでそう簡単には終わらなかった。

サブジュー「ゲイトの子孫は代々聖戦を続けてきた。

スクローラ聖書の序文を軽く要約して、淡々と読み上げた。

「……いえ、説明になってませんから。しかも僕は神とか、そういう類のものは一切信じてませんし」

「神はいるの！君もみたでしょ？昨日のアレ、天使」

「は！？」

サブジュー「ゲイトはアダムとイヴの時代の人だ。

彼の子孫は御技により繁栄を続けた。

今や世界中に彼の血が散っている。

「……天使どうのこうのはおいといてと……。つまり僕はその、サブジュー「ゲイトって人の遠い子孫てな訳ですか」

「わあ、呑み込みが早いねー！」

小馬鹿にしながらそう言ってみた。

人は誰しも“夢”を持っている。

“夢”というのは、心、気持ち、性格、記憶などを合わせたものだ。

そしてサブジュー「ゲイトの子孫の“夢”には特徴がある。

“夢”の“核”が有形なのだ。

核というのは“夢”の中心のことで、自分の中身の塊、象徴物と言った方が分かりやすいがそんなものだ。

そして一般人の“核”は霧の様に形がない。

「……あえて質問しないことにします」

「そうそう、そーやって全てを呑み込んでいけば何とかなるよー」

「……そして、その聖書とやらを要約して淡々と読むのやめてくれない？」

「えーめんどくさいー」

それでも聖書を閉じた。

でね、その“核”っていうのは通常石の形をしているんだー。さつきレインから取ったのがそうだよ。

そしてそれらは武器になる。

上手く扱えばダイヤモンドより硬く、下手すればトウフよりも脆くなるのー。

……え？トウフ？

んー、ボクはあんまり好きじゃあないんだけど、日本のヘルシーフードなんだってさー。

ボクは説明が下手だから、話があっちこっち飛んじゃうけどちゃんとついてきてねー。

さっきも言っただけど、アリスにだって手下はいる。

レインが昨日見たアレがそれ。

そうだよー、天使。

正確に言っと、墮天使。

……え？何言っちゃってんの？CG？そんな訳ないじゃん。

とにかく、その墮天使はボくらゴッドハンターではない凡人の“

夢”を喰うんだよ。

……“夢”をなくした人はしばらく生き人形になるんだけどね。
その内また別の“夢”っていうか人格？が形成されるケースも少な
くはないよ。

「なんでですか？」

「ゼーんぶ話すからって言わなかったっけ？そしてその喋り方ム
カツクからやめてくれないかなあ？」

「スミマセン、癖です」

最初敬語使ってなかったけど？

つつこみたいのを我慢して、話を進める。

その堕天使はね、トループって呼ばれてるんだ！。

トループにはレベルがあつてね、七期まで進化するよ！。レベル
は目の色で判断するんだあ。

一期。これが一番雑魚ね。目の色は黄色。

二期。ちよつとずつ地震の特殊技を目覚めてきているからちよつ
と気を付けた方がいいかも！。目の色はオレンジ。

三期。自分の使命を全うしようとしてもがいている頃だよ。ま
だまだ弱いけど、このレベルは最期になって暴れ出すからね？色は
黄緑。

四期。そろそろ特殊技が身に付いてきたかなーってぐらいだよ。
目は緑色。

五期。このレベルはかたまつて行動したがるんだよ。その大群を
レギオンっていうんだけどね。それなりに強くなってきてるから玄
人でも苦戦するの。目の色は紫。

六期。強いよ、このレベル。ボクの部隊以外からでる死者とか瀕
死の重傷者とかの三分の二はこいつらが原因なんだよね！。目は青
そして一番強い七期。これは数が限定されてるんだよ。ぴったり
十二人まで。それ以下はあり得るけど、それ以上は絶対に無いんだ

ってさあ。数年前に一匹倒したから、今は十一人か十二人に戻ったのか……、分からないけどね。そしてこのレベルの中で一番強い奴がいるんだって。ボクは見たことないけどね、それが当然なんだけど。ここまでレベルアップするのに天文学的な数の“夢”を喰わないといけないのにスゴイよね。あ、目の色は赤ね。

ボクラゴッドハンターは、“夢”を武器として彼ら墮天使を狩る。アリスを止めないといけないの。討伐すべき存在なんだよあ。それが、ボクラの遠い先祖のサブジューゲイトの血の契約だから彼のDNAが欠片でも入っていたら、自然とここまで来るもんだよ？自ら志願してくるサポーターもいるけどね！。そしてねっ、レインもボクラの仲間なんだよ！

レインは黙っている。

もしかしたら変な宗教の勧誘を受けているのかなと思っているのかもしれない。

ロゼッタはさめた昼食を食べながら待った。

「あの……。僕よく分からなかったし、そういうの関係ないと思うんですよね」

「ふうん。だから？」

「帰ります。頭おかしくなりそうだし」

その言葉にロゼッタは吹き出した。

「ツアハハ！帰るのお？それはちよつと駄目だし無理だなあ」

レインの表情は少し怒気を孕んでいた。

「何ですか？犯罪の一種で訴えますよ？」

「へえ？やれるものならやってみなよ！。世界中のどこにも、ボクラ救世主を裁ける政府は存在しないよー？」

それでか、とレインは納得した。

広場や町中や教会で騒ぎがあっても、警察は来ないし新聞にも載らない。庶民の間で流行っている話題をとりあげる番組も、いくら

投稿しても放送しない。

全部全部、そのせいだったのだ。
自然とムツツリとした顔になる。

「えー、そんなに怒らないでよー。恨むならボクでもここでもなく
サブジューゲイトを恨みなよー」

今や塵と化している人を恨んでもしょうがない。

が、このロゼッタとかいう人達だけが悪いとも思えない。

だいたいここに入り込んだのはレイン自身だ。故に責任は自分にある。

「一応聞いときますけど、貴女って何歳ですか？」

「うわあ、レディに向かって年齢聞くななんて失礼い」

「淑女よりもむしろ少女ですよ」

「……十四歳だよー。たぶんだけどねー」

レインはちよつと驚いた。

自分と同じ年代の少女が訳の分からない闘いに駆り出されている
だなんて意外だった。

「あー、そうそう。レインにはここに住んでもらうからね」

「はっ!？」

実は「え？」よりも「は？」の方が丁寧なのだそうだ。

ロゼッタはきつい言い方するなーと思っっているようだが、それが
本当のことなので仕方がない。

「何言い出すんですかつ！僕やつぱり帰ります！」

「だーかーらー、それは無理だつて言ってるでしょー?」

急に立ち上がるうとするレインを押さえつけて、ロゼッタは諭す
ようにそう言った。

「どうして!」

「んー、確かにね、君が行こうが消えようがボクらにとっては大し
たことじゃあない。時が来ればまた来るからねー」

じゃあいいじゃないですか!とレインは叫びかけた。

が、その前にロゼッタが耳元でささやいたのだ。

『でもねー、レインと、レインのだからーいじな人達が死んじゃうよ
お？生き人形になっちゃうよ？』

まるで面白がっているような声。

冷笑を浮かべたその口から、

そんな脅し文句が出てきた。

背筋にぞわつと悪寒が走る。

ロゼッタはレインから身を離して、無垢な笑顔で

「記憶は消されたく無いでしょー？いろいろと厄介なことになっちゃうしねー」

と言った。

無垢な笑顔だからこそ怖い。

この建物の内外、そして敷地の端である門から何層にもわたって
強い結界が張られているのだという。

ここに迷い込んだ一般人には、その力の片鱗がついてしまう。

それを消す特別な薬があるのだが一般人は当然の如く使いたがらない。

このオカルトめ！

そう怒鳴られるのだ。

もつともレインはそれが正常な反応だと思うのだが。

結界とやらの力を消すのは難しい。

薬は使えない。

だから科学班と医療班の人、もしくはロゼッタの能力を使って、
記憶を消す。

力を残したままだとゴッドハンターと思われてトループに殺されて
しまう。その人のまわりにいる人も危険にさらされる。

だから記憶を消すのだ。

それで力が消える。

ここに来たことを忘れてしまえばいいのだ。何も覚えていないの

だから、守護の結界は作用しない。

完全に無関係な人に守護をかけても仕方がないだろう。

「ねえ？記憶がなくなるのは、怖いよね？自分のメモリーに空白があるのは、恐怖だねえ？」

ロゼッタは口元に冷笑を浮かべた。

「じつ、じゃあ！僕にもその薬とかを使えば！」

「んー、一般人はね、薬を使ったがらないし使えない。それを使うのにはハンターかサポーターであることを証明する物が必要なんだからさあ。それにね、一般人には体力がない……、つまり凡人として生きてきたレインには使えないってこと」

クスクスと笑いながらロゼッタはそう言った。

レインは呆然としている。

「……………。つまり、僕はその、神狩りにならないと外には出られない、と」

ずるい。

レインははめられた気がしてしかたがなかった。

こんなのただの詐欺だ。

だが、もちろんロゼッタにだって事情はある。

ここは万年人員不足なのでこうでもしないとゴッドハンターは増えないのだ。

自ら志願してくるのは代々ゴッドハンターをしてきた由緒正しい家系ぐらいしかない。

「…………でも学校とか」

「えー？そんなの、どーでもいーでしょー？」

「！せつかく義父様が出てくれたお金で入ったのに！レベルの高いところに入ったのに！」

最後の一言が腹立たしい。

叫んだレインをロゼッタは鼻で笑う。

「大丈夫だよー。もっとレベルの高いところに奨学金で入り直したーって言えばさあ」

そうなのだ、そこはどうってことない。問題として扱う方がおかしい。

「ヴェルスカノ校長が、言ってくれるよ？」

「……？」

「だってここ、表向きは寄宿制のエリート校ってことになってるんだもん」

ゴッドハンターの人員不足をなくすための努力をなめてはいけない。

そのためなら、表にどんな名前でもつけるのだ。
ロゼッタはおもしろくなりそうだと微笑んだ。

+

どうだ？上手くいってるか？

はい。……ですが、どうしましょう。
どうした。

彼女の過去に出てきた人が現れました。

……ああ、そうだな。

知ってたんですか！？じゃあどうして……！

彼女が思い出す訳ないじゃなか。

そうですね……。

機械の放つ淡い光だけが頼りの部屋の中で、黒い影しか見えない
が何人かの人が会話していた。

2 INVADER〜侵入者〜(3)(後書き)

ここまで読んで下さりありがとうございます。

読み方についてですが、義父様をおとうさまとお読みください。

これからもよろしくお願いします。

3 MASTER AND BUTLER 主人と執事 (1)

翌朝、自分のいる医務室まで自称お姫様が朝食を運んできた。

はつきり言って彼女はウザイ。性格はどうか知らないが喋り方が大変苛立つものなのだ。あの語尾を伸ばすところが腹立たしい。

あと人の不幸を面白がって嘲笑うところも嫌で仕方がない。

昨日はここについているいろと説明を受けた。

本当はゴッドハンターだとか言う不明なものは信じていないしな
る気もない。だがイリンドーム曰く血の使命なのだそうだ。

ついでに彼女が持って来た指示を書いた紙を受け取り、これまた
腹が立つのだが美味しい食事を一人で食べる。

そうしてから指示された場所に向かった。

が、散々迷ってしまった。ここは地上より地下に広がっているの
だと言う。迷路にしか思えない。

やっと辿り着いた広い場所にはたくさんの人がいた。

彼らは剣や銃などの一般的な武器から見たこともない武器を振り
回している。

木刀を使っている人もいれば、隅で軽い運動をしている人もいた。

「あーレイン、遅刻だよー。迷っちゃった？」

いつの間に来たのか、目の前にロゼッタが立っていた。

「……ええ、ちよつと」

「アハハー、大丈夫だよ。ボクも最初はそんなだったからねー」

「それで、僕は何をすればいいんですか？」

「まずは体力作り。この修練場の周りを……最初だから十周ぐらい
でいいかなあ？ねーミキー？」

その声に応えてすぐ近くで少年と組手をしていた青年が振り向い
た。

不思議な髪の色をしている。何と言ったらいいのだろうか。とこ
ろどころにエメラルドグリーンのグラデーションが入った薄い金色、

と言うのが一番いいのかもしれない。

そして彼は漆黒の眼帯を右目にしていた。

「まあ、最初だからな……それぐらいがちょうどいいだろ」

二本のリボルバーの引き金を交互に引き、相対する少年が放つ大きな砲弾を撃ち落としながらミキという青年が言った。

彼は最後に二発撃ち少年を吹き飛ばした。

「シャンデット！」

横で二人を眺めていた少女が慌てて少年を追いかけていった。

血が出ていなかったあたり、彼らは防弾チョッキでも着ているのだろうか。

俺もその内こんなことさせられるのかな。

命をかける仕事だとか、そういうのは嫌なのに……。

そう思いながらも興味津々で青年を見る。

「……ああ、初めまして。俺はミキ・ユリニア。スペードの」だ。よろしくな」

喋り方はクールだった。だが声には温かさが混じっている。

が、妙に気に入らない。

「どうも……」

「ほらあ、挨拶ぐらいしなよー。何、エリート校生は自己紹介もできないのー？」

ロゼッタの声がプライドを刺す。

本当に失礼な人だ。

「……、初めまして、レイン・ディアナイトです」

「そうか。レインって言うのか。それじゃあ、この周りを軽く二十周で」

ぎよつとして周りを見る。

学校のグラウンドだとかいう、そんなサイズどころではない。校舎と校庭をセットにしたものが二つ入りそうなくらい広い。その周りを二十周も走れと。

……これいびり？どこが軽く!？

ナルシストではないが、自分は結構体力がある方だと思う。
が、これは流石にない。

目の前にいる少女ーロゼッタは細身だが、これぐらい散歩に
かならないと言える程の筋肉の持ち主なのだろうか。

「えっと……」

「あ、きつい？それじゃあ十周でいいよ」

それでもきついですから。そう言いたくなつた。が、我慢する。

この人達とコミュニケーションはとりたくない。仲間意識を持
ちたくないのだ。持たれても困る。

いつまで経つても始めなかつたらまた何か言われそうだったので
仕方無く走り出す。

「頑張つてねー！基礎体力無いと死んじゃうんだからさー！」

笑顔で言わないで欲しい。それと物騒な単語を応援の言葉にのせ
るのもどうかと思う。

「よし、じゃあロゼッタ、久々に俺と手合わせしてみるか？」

「やったー！ミキとするのは久しぶりだなあ」

歩行スピードと変わらない速度で走りながら、横目で二人を見る。
ロゼッタの手がほのかに光った次の瞬間、ミキが吹き飛んだ。

「不意打ちは無しだよ……」

柱にぶつかつて、ミキはゲホゲホと咳き込みながら立ち上がった。
うわ、痛そう。

「これでも手加減したんだよ」

一丁の拳銃を片手にロゼッタは笑っていた。

……あの人、鬼だ。

「それだと思える手加減をしるよ！」

飛び出してきたミキに、彼女は連続で六つの弾を撃ち込んだ。
彼が再度吹き飛ばうが関係ない。

レインは地道に走り続けた。

今日は体力だけをつけてやれとエリックに言われた。

アリスについて、ゴッドハンターについて。そんなことは後回しでもいいから、まずは“核”である石を扱えるくらいの体力をつけさせる。

ロゼッタは新人りの教育係をしたことがないのでその言葉に従った。

だから修練場十周と指示したのだが……。

やはり最初は一周か二周くらいから始めた方が良かったのかもしれない。

というのは、レインが五周目の途中でバテてしまったからだ。組手をしないルーシーがおろおろしながらレインの世話をしている。

横から飛んできたミキの弾を撃ち落とす。

「ミキい、もう長〜いことやってるから、そろそろやめにしようよ。明らかにミキの劣勢だよー？」

二発素早く撃って彼の武器を弾き飛ばした。

「そうしようか。ロゼは戦いの途中で武器を変えるから……お手上げだ。ついていけない」

息を切らしてミキが言った。

「ボクに勝つなんてミキでも無理じゃあないかなあ」

「……驕るなよ」

「アハハア」

エリックと同じことを言われた。

別に驕っている訳ではない。そういう性格なのだ。

「どうしようかな〜、そこで死にかけてる新人君はあ」

「俺に聞くな」

ルーシーの手際の悪さを見かねて、ロゼッタはレインのところに歩いていった。

「大丈夫〜？」

「……最、初から、あんなに走ら、せないで……くださいよ」
まだ息が切れてる。

「んー……。じゃあ、二周走ったら休憩ね」
レインはうなだれた。

しばらくは辛い毎日が続きそうだ??彼にとって。

+

ロゼッタは派手に舌打ちした。
何アイツむかつくんだけど。

普段は楽しめるこんな展開が何故か気に入らない。
何が気に入らないのだろう?

敬語は日常的にサポーターから使われているのでどうも思わない。
実力もそこそこだがあるにはある。

やる気が感じられないのは……まあしょうがないことだろう。

土気満々で来る人も二、三日辛い修練が続くとやめたいと文句を
言い出すものだ。

打ち解けてくれないのも仕方がない。ここから出ていくために鍛
えてるのに仲良くなってもどうしようもないというところは理解し
ている。

「つわー、ロゼがこんなにイライラするの久しぶり」
ベーコンエッグを口に運びながらシャンドットが言った。

手に持ったフォークで目玉焼きの黄身を突き刺す。

ルーシーが怯えたように肩を震わせた。

「ロゼちゃんなだめられるの……、ミキ先輩と上層部ぐらいだもん
ね……」

「うつさいなあ、黙りなよ」

「……でも怖いから。……ミキさん今任務でいないし……」

か細い声で言い続けるルーシーを鋭く睨みつける。

「聞こえなかったのかなあ? 黙れよ、この許嫁依存症が。お前のそ
の“夢”壊してあげようかあ?」

周囲の空気が一気にすさむ。

三人を気にもとめず食事をしていた人達までもが口をつぐんで押し黙った。

静かなのはいいことだね。

そう思っ、さっきの続きを考える。

本当に何が気に入らないのだろう。

覚えるのも早いし反抗もしない。

出ていきたいと思っ、おとなしく言いなりになっ、いる。

「ああ、そうかあ……」

そこが気に入らなかつたのか。

出ていきたいと思っ、ならそれなりの覚悟を見せて欲しい。行動で示して欲しい。

別にボクは何もしない。

足掻けばいいし、もがけばいい。

……それを見るのが、楽しいから。

「おい？ロゼ？何か怖いこと考えてないかー？」

大して使えないのに、観察力だけはあるみたいだ。

3 MASTER AND BUTLER 主人と執事 (2)

今日はアリスについて教えることにした。

一生の約半分をゴッドハンターとして生きてきたロゼッタでも全てを覚えている訳ではない。なので嫌々従っている感丸出しのレインを引き連れて資料室に行く。

「まだ朝早いのに何でこんなに人がいるんですか」

「安全の為だよ」

一言で片付けて、あちこちの本棚からファイルを数個ずつ取り出した。幸い、貸し出されている物はなかった。

空いている席に座りファイルの一つを開ける。

「アリスとトループのことはちよつと話したよねー」

「ええ」

「じゃあちよつと復習してみよーかあ。覚えてること要約して言うてみて？」

レインの目に不満そうな色が宿る。

ロゼッタはそういうのを面白がる傾向があるので全くの逆効果だ。
「……神は十三人いて、その内一人をアリスと言つて……。コスモスを憎んでいて災いをおこすから神が止めに入っただけ駄目です。それで……サブジュ「ゲイト」って人が選ばれてらいらいトループやアリスと闘っている……と」

「そ、正解！結構できるじゃん！」

コスモスができるずーっとずーっと前には、神は十二人しかいなかった。

大御神の名前知ってる？……そう、ゼウス。

ゼウスがつくった子供が、それがアリスなんだよー。アリスは大御神の子供なんだあ。

他の神々はゼウスの後継者がどんな奴か期待していたらしいんだ

けどね。

アリスは本当の神じゃあなかったんだよ。

まあゼウスは後々ニンフとか人間の女性とかとの間にたーくさん子供をつくったんだけどね……。

アリスはゼウスとその妻ヘラの子じゃあないの。落ちぶれた女神のはしくれ……アリアとの間に生まれた混血。

普通の神の跡継ぎは、ちゃんとした神の間に行けるもんなんだけどさあ。ヘラに子供が生まれなかったから、仕方ないってことで後継者はアリスになったのー。

それで、その母親のアリアもそれなりの地位を約束されるはずだったんだけど、アリアはおても美人でしかもゼウスと子供をもうけたって知られて、ヘラに殺されちゃったんだよねー。

母親がそんなだからねえ、アリスはまわりの神々に認めてもらえなかった。

アリスがコスモスを創らなかった理由はそれ。

まわりの神々が許してくれなかったから、アリスは創造主になれなかった。これがアリスの憎しみの一つね。

そしてカオスが無くなってコスモスができたでしょ？

神々はコスモスが気に入ったから、オリンポスを出てエデンの園を創ったんだよ。

あ、オリンポスはここね。……そう、その丸。実際はその空間っていうか、何て言うの？時空のはざま、にあるみたいだねー。

アリスを連れて行くのは癪だけど、一人神殿においておくのも不安だったらしく？あ、別にアリスの心配じゃあないよ？神の国の安否の心配ね。とにかく、アリスもエデンの園に住んだの。

でも、自由に歩けなかったんだよ。

父親が創った人間を見ることができないし、実の子である自分よりも大切にされる人間が妬ましかったんだろうね。これがアリスの憎しみその二。

「え、じゃあアリスが人の“夢”をトループの餌にしてるのも」
「うん、ここからきてるよお」

察しがいい子だ。流石エリート校に通っていただけある。

負の感情が積もりに積もったアリスは、とうとう行動にでてしまった。

始めは単なる悪戯に過ぎなかった。

そーだね、記憶によると……川の水をからしたり、周りの木が実らないようにしたりとか、とにかく人間が不自由になりそうなことをしてみたいだねー。

……ん？これが単なる悪戯かって？ボクが直接見た訳じゃあないんだから突っ込まないで欲しいなあ……。

まあ神々が簡単に元に戻せたんだから、悪戯に過ぎないんでしょ。

でもね、ここで止めなかったから悪い。

原罪って知ってるう？

アダムとイヴが禁断の実を食べてしまった人類最初の罪。そう、

それが世間一般の正しい答え。

でもねボクらの中では、『大御神に従っていた人間を唆して無理矢理食べさせたアリスの罪』なんだよ！

もちろん聖書は読んだことあるよね。

そのシーンに蛇が出てくるでしょ？

あれが、今のトループの元だよ。アリスの手下、アリスが初めて造った負の感情の塊。

本当は、出ていくのはイヴだけで良かったらしいの。

だってね、イヴはアダムから生まれたから。あばら骨をもう抜く訳にもいかないから、女はもう創れない。それに人間は独りじゃあ生きていけないでしょ？イヴがもしも一人追放されたなら残されたアダムも一人。神が心にかけるのも二人から一人に減るだろうってアリスは思っただろうねー。

でもどつちも出ていった。

エデンから出ていっても、人間達はまだゼウス達に大切にされた。そしてアリスもエデンから追放された。

そこがアリスの計算違いで、親からも見放されて、そして誰からも認められないアリスはエデンの園を壊したの。追放されたその翌日に、ね。

今は枯れた果てた土地に宝石でできた城が建ってるだけのアリスの住処になってるよ。

神々はどうしようもなかったからオリンポスに戻っていったんだあ。

そこで天使の軍を作ってアリスの元に送ったんだけどね。聖なる力だけじゃアリスの負の心には負けちゃうの。大御神側の大敗だったらしいねえ。

だからサブジュニゲイトが選ばれた。神の力で負けるなら人間をも使おうってことかなあ。

彼は御心になうような人だったんだってさあ。………そんなのが本当にいたらおもしろいけど。

……この前言わなかった事実を、教えてあげるね。

『聖戦は、その時代に終わったの』

ロゼッタはクスクスと笑いながら言った。

レインは理解できないのか、そんなロゼッタを見返している。

『アリスは、死んだ』

アリスは死んだ。サブジュニゲイトに殺された。

でも死ななかった。肉体はちゃんと死んだ。けど、忘れちゃいけないのがトループ。

トループは自分が食べた“夢”の三分の一をアリスに献上するの

」。

大量に与えられた“夢”が、アリスの中身——つまり“夢”？？を支えた。

ボクらはただアリスと闘っているだけじゃあない。

サブジュ「ゲイトの間違いを潰すために在るんだよ。」

「……えっと」

「ん〜？」

「アリスは死んだ、と……。なのに何で僕達が闘わなきゃあいけないんですか」

全部話すと言ったのに、いちいち質問してくるなよ。

そう思いつつもロゼッタは喋り続けた。

残ったアリスの“夢”、それを“アリスの核”っていうんだけどね。

まあそれがある限りアリスは生きていることになるしー、身体も持つことになるんだあ。

……。

そんな『は？』っていう顔しないでよねー。ボクこっぴどいの初めでだからさ〜。

……うーん。早いとこ、アリスは人間だよ！

もしもレインが何かを飲んでいたら盛大にむせるところだったろう。代々ハンターをしてきた家の子でも、この事実には驚く。

「はっ！？」

「え、そんなにその言葉連呼しないで」

「突っ込まないで説明して下さいよ！人間が神になんて……」

やりたくないのに熱心に質問してくるのは知らず知らずに身に染込んだ癖なのだろうか。

レインが通っていた胡蝶学園では、発表や質問数もテストの点数としてカウントされるのだと言う。当然、そんな癖がつくはずだ。「人間が神になっちゃあいけないの？人間は、ただ単に神の形をしているだけじゃあないんだよ。神の持つ力、知識。元々あったものをエデンの実でより目覚めさせたの。でもね、人間は神に枷を付けられているんだよ。神にならないようにーってね。神がボクらに与えたのはそれだけじゃないよ。例えば、そーだねー……罪と罰とか」

「あ、え、でもそれじゃ原罪っていうのと矛盾するんじゃない」
また口をはさまれた。

レインの教育係には本当に嫌気がさしてくる。こういうのは根気づよいサポーターにさせるべきだと思う。せいぜい自分よりベテランの人にして欲しい。

「原罪っていうのは！人類最初の神に対して犯した罪！全ての生ある物は、必ず生まれながらの罪を持つてるの。生まれてくるのも罪、それに対する罰は死っていう風にね」

それじゃあ続けるね？

……あ、それとね、レイン。次途中で口はさんだら殺すよ？質問は最後にしてね？

パンドラの箱って知ってる？あれもそう、神がくれたもの。

パンドラの箱にはいろいろ説があるんだけどね、ボクらが信じているのは病気とか悪霊とかが詰まっていたっていう説じゃあなくて良いものが詰まってたっていう説なの。

人生を飾る幸福が逃げても、一番大事な希望だけは残るっていうヤツ。

トループは人の中身を喰いつくすんだけど、希望だけは取れないの。

だから新しい人格とか“夢”とかを作る人がいるんだけどねー。

でもね、最後まで残る希望もあまりにも辛いことがあると消えてしまっただよー。

大抵の場合は神が哀れに思ってたまた与えてくれるんだけどね。それすらも拒否して、神を呪って、自分の“夢”を自ら壊す人がいるの。何世紀かに一人ぐらいね。

そういう人に“アリスの核”が入り込む。

アリスは神だから、もちろん憎い神々が付けた枷なんていないでしょ？

だからアリスは枷を壊すんだ。

こうしてアリスがでかあがります！

レインは呆然としていた。

まさか自分の闘うべき相手が人間だなんて思いもしなかったのだろ。

先に話すべきではなかったのだろうか。さらにレインの逃げたいという心を押してしまったようだ。

「え、じゃあ僕が殺すのは人間なんですか？」

通りすがったハンターがふいた。

ロゼッタもクスリと笑う。

レインは何で笑う！という感じで不満そうな表情をしていた。

「久しぶりですね、イリンドーム様」

そのハンターは立ち止まってロゼッタに礼をした。

「あゝ、久しぶり。イフェン、彼は新入りで脱走を願うレイン・ディアナイト。仲良くしてやってね。そしてレイン、この人はイフェン・ザリア。普段はここにいない人だよ」

「ああどうも」

レインは素っ気なく返した。

「おやおや、笑われて不服そうですね……これは失礼いたしました。何せ貴方の発言が常識に欠けていたので。貴方を含め、我々は直接アリスと闘いません。我らが剣を交えるのはトループ共だけなので

す。アリスを狩るのは我らが姫、イリンドーム様だけなのですよ。彼女は今代のアリスハンターでしてね、とても優秀なんですよ。

イリンドーム様の率いるスピード部隊に入るなら、貴方もアリスの所まで行かないといけなくなるかもしれないが……、重ねて言いますけど我らはアリスを狩りませんし実力的に狩れません。イリンドーム様の専属サポーターなら別ですけどね、貴方は名前が違うのでそれも無いでしょうな」

流石はイフェンだ。説明が上手い。

「ハッ、そうですか。それはどうも」

対するレインは態度が悪い。

イフェンが握っていたプリントにしわが寄る。今にも舌打ちしろうだ。

「それにしても……イリンドーム様、こいつはノアー族のものですか？」

「あゝ、ソンプル人かっ？？さあねー。向こうのこと知らなさそうだし、ボクもコイツのことあまり知らないから」

「そうですか」

軽くお辞儀をして、イフェンは去っていった。

レインはしばらく彼を見ていたが、やがて「ム力つく」と低く呟いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8378z/>

ゴッドハンター

2012年1月14日18時48分発行